
とある暁の都市平和（パクス・シティーニア）

平井純譚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バクス・シティーニア
とある暁の都市平和

【Nコード】

N0299S

【作者名】

平井純諷

【あらすじ】

尾獣事件から数カ月たったある日。

サソリといつものメンバーの変わらぬ日常が新たな転生者によって一変した。

ナルトの世界で大暴れした「暁」のメンバーがほとんど転生してきてサソリ達の波乱な日常がスタート。

果たして彼らは本当の平和を手に入れることができるか？

1 はじまり…（前書き）

皆さん！！

帰ってきましたよ！！

いよいよ完結編に着手しました。

意見や感想を待ってます。

1 はじまり…

学園都市を震撼させた「テイルビースト尾獣事件」から数カ月経ち、都市は以前の
ような賑わいを取り戻しつつあった。

忍の世界から転生してきた天才傀儡師「サソリ」といつものメンバ
ーによる何気ない日常を綴った物語です。
そして、新たな転生者が……

学園都市の中で佐天が住んでいる部屋の一室で天才造形師という異
名を持つ「赤砂のサソリ」が熱心に机に向かって巻物に何かを書い
ている。

「よし…終わった」

何やら古典的な言葉と真ん中に大きく描かれた>>人<<という字
が目立つ。

サソリが習字道具を片付けていると朝食の用意をしている佐天が部
屋に入ってきた。

居間の扉とサソリは向かい合うように作業していたため佐天にとっ
て巻物は逆さ文字に見える。

「何やってんの？うわっ！！難しそう……」

黒墨が付いた筆を余った紙でふき取っているサソリが言う。

「いや…そろそろアイツを片付けないとマズいだろ…」

サソリが指したのはタンスの横で静かに横たわる「畜生道」と呼
ばれる女性だ。

畜生道……NARUTO原作でペイン六道の一人として登場した。
前作の尾獣事件で活躍した女性です。

橙色の髪の毛に暁の組織服を着ていて身体中にチャクラを受信するアンテナが植付けられている。

「それね……結構夜中に見ると怖かったわ」

「てつきり尾獣の件が終わればペインが持つて帰ってくれるかと思つたが……全然、消える気配がないから……」

赤い頭をポリポリ掻きながら首を傾げる。

そしてサソリの眼に宿るのは、忍術の祖「六道仙人」と暁のリーダーが開眼していた「輪廻眼」がある。

そのため、俺はあらゆる忍術が扱える。

と説明されたが傀儡を専門に忍術を行ってきたから……他の忍術がどんなだったか？

と考えると進まなくなる。

それに都市の中でぶっ放すのはさすがにダメだろ……また白井が来てしまう

よって、新術開発や練習ができない。

だけどこんな世の中で使う機会なんてそうそう……

「っで！！不思議な能力でポポンと片付けられるんでしょ！！？やって見せて！」

佐天の眼がキラキラ輝いているのがサソリにも伝わる。

「いや……それが問題だ……」

「？」

佐天は首を傾げた。

そりゃ……佐天の小さい頃から使っている習字道具を借りてみたけど。

「俺が書いたのは、口寄せの術式という奴なんだが……これは遠くに
いるモノを呼び出す忍術だ……」

「…口寄せ…？…サソリの人形を出す時に使ってたのだ！！凄いスゴイ！！」

佐天のテンションが急激に上がり顔が紅潮している。

「あのなお前…俺の言ってる意味が分かるか？」

「？」

あつ！！分かってなかった…。

「だから遠くにあるモノをいつでも引き出せるのが口寄せ……つまり置き場所の根本的な解決になつてないんだよ……」

サソリが軽いジェスチャーを交えて説明する。

すると佐天は納得したように「おおっ！！」と言つが刹那「ダメじゃん！！」と驚くように言う。

「…さつきからそれを悩んでいたんだよ……どうすっかな、何処に置くかな…」

「フウエイさんの所はどうなの？」

フウエイ…前作でサソリの傀儡「三代目 風影」とレールガンごと御坂美琴のDNAを複合して生まれた存在。

現在、空き研究所に住んでいる。

時々来ては、よく分からないお土産を渡してくる。

「やだよ…アイツの研究所に置いたら絶対改造されそうだし…」

御坂の顔に傀儡で着ていた黒い装束のフウエイ（マスター！！ミサイルを打てるようにしましたよ！！サービスで眼からビームも！！）

佐天が苦笑いを浮かべて妄想をかき消すように首を横に振った。

「何だかんだで輪廻眼も必要な時に役に立たないんだな……見るだけで吸い込んで異空間に置けるとか…」

自分の手をじつと見る。

「そんなことの為に異空間作らないでよ！さっ、早く朝食を食べて行こうよ。初春と会う約束してんだから！」

「そうか…初春の所に置いてみるか…」

「止めなよ！！新手の嫌がらせよ」

とあるビルの屋上

「変わった里スね…」

黄色く長い髪に両手の掌から口が浮き出てだらしなく舌を出している男が言った。

「オイラの芸術を知らしめるにはお誂え向きだろうぜ……うん」
鞆から起爆粘土を取り出して掌の口に押し込んだ。

「そこまですておけ…デイダラ…」

橙色のツンツンとした髪型の男が止める。

「冗談だ…うん…ここにいるんだろ……サソリの旦那がよ…うん」

ビルの上で都市全体を見渡していたデイダラともう一人の男。

そして、デイダラは掌の口に押し込んだ起爆粘土を巨大な鳥へ変形させてそこに乗り込んだ。

「しかしよ！！こんな形でオイラ達のリーダーに会えるなんて思ってたなかつたぜ…うん。ペインの旦那」

デイダラがそれだけ言うつと学園都市の上空へ飛び出した。
残ったのは、暁のリーダーだったペインだけであった。

「……………」

その顔はいつになく複雑だ。

2、喫茶店でのドラマ（前書き）

2話目から暴走しておりますが問題ないです。

暁のメンバーとある科学のメンバーの絡みで希望があれば送ってください。

今後の展開の参考にします。

なければ私のでドンドン進んでいくだけですが……

2、喫茶店でのドラマ

いつもの喫茶店へ

窓際のテーブルにサソリ、佐天、初春、白井、御坂がそれぞれ座り雑談をしていた。

学校での出来事や都市伝説といった類のことを主に佐天が先陣を切って話している。

それに対して、初春の反応は話し手に安心感を与えるようにリアクションをとってくれて御坂は、「うんうん」と相槌を打っている。しかし、白井はメニュー表を眺めたりして聞き流しているようである。

ちなみにサソリは、前夜に新たな都市伝説を発見した佐天のハイテンションに付き合わせられた為、今日の会話の八割は把握済み。

ボヤとした顔でサソリが外の様子を眺める。

「……という訳なのよ！！凄い計画が予測されているんですよ！」

佐天が大きな身振りで説明を終えたようだ。

サソリは隣で一仕事終えてジュースを飲む佐天を見る。

「しかしねえー！噂の域を出ないから何とも言えないわ……」

「フフ…噂話を侮らないでくださいよ！前あったティルビースト事件も実は予言されていたという話もあります」

そんなわけないだろ……

と心で突っ込むサソリ。

「そうですね佐天さん！！されど噂話です」

初春が頼んだイチゴパフェにスプーンを差し込んだ。

ジャッジメント

「そういう話なら風紀委員の中でもありますのよ……確か、粘土男

クレイマン

のことですか……」

「どんな話ですか!？」

「わたくしもよく存じないのですが……芸術は爆発だ!!みたいなことを言って粘土を爆発させる能力者みたいですよ」

コップに入っている氷がゆっくり溶けてカランという涼しげな音を立てる。

「変な能力者ね…それに聴いたことがないわ」

「これも噂ですよお姉様!」

白井の話に反応したのはサソリだった。

(随分、デイダラの野郎に似ている奴がいるんだな…)

この時、全然気づかなかったサソリであるが……三度窓の外を見ると……

往来する学生とは明らかに異質な空気を醸しだしながら彷徨い歩く橙色の髪をした男がいた。

…よく知っている暁の外套を羽織っている。

ギョツとしてよく眼を凝らしてみている。

男は喫茶店からあまり離れないように歩いては、数秒立ち止まって歩き出すという奇妙な行動をしていた。

あれ…やっぱ何処かで見たことある奴だぞ…

しかし、次の男が振り返った時に推測が確信に変わった。

振り返ったことにより男の顔がサソリの位置から確認できた。

ツンツンとした橙色の髪に波紋のような輪廻眼、そしてピアスのように付けられたチャクラ送受信用のアンテナ。

……間違いない……ペインだ……

サソリは、テーブルに倒れこむような体勢になりながら「なんでいるんだよ……」と呟くが幸い他のメンバーには気付かれてないようだ。とりあえず、かつて所属していた組織のリーダーを無視するわけにもいかないので……

「佐天……スマンがそこを退いてくれ……」

隣で議論している佐天を押し退けて一人男子トイレに消えていった。

「……？何かあったのかな？」

「さあ……？」軽く佐天と初春が疑問の声を上げる。

男子トイレの中に入り込んだサソリは、袖から巻物を取り出して床に広げだす。「まさか、すぐに使う機会がくるとは……なるべく佐天達に気付かれないようにしたいものだが……」

中央に描かれている>>人<<という字に手を重ねて「口寄せの術」と唱えた。

ポオン！！という音と共に白い煙が立ち込める。

すると橙色の伸びた髪とチャクラ送受信用のアンテナが付けられた畜生道が出現した。

輪廻眼の遠隔操作でペインとの接触を図るらしい。

まずは畜生道をトイレの外に出して時間差でサソリが出るが……男子トイレから畜生道という女性が出てきたのでお客が数人驚いたように目をぱちくりさせた。

サソリは、何事もなかったかのように席に戻り（佐天にもう一回譲ってもらい）輪廻眼での遠隔操作に集中する。

畜生道は、サソリの意志を受け継ぎそのまま喫茶店のドアをくぐっ

てペインが彷徨っている所に近づくために外に出た。
店員が首を傾げながら「ありがとうございました!!」という声が響かせるがそれどころではない。

畜生道はそのままペインの所に走っていき後ろ向きの彼の裾を掴み
「何でいるの!？」とかわいらしい声で訊いた。

トイレから帰ってきたらブツブツ独り言を言うサソリを不思議そう
に確認しながら御坂が佐天に質問した。

「なんかサソリが独り言始めたけど…大丈夫なの?」

別にボケたわけではない…

「おそらく畜生道の操作をしていると思いますよ…となればこの近くにいるはずですから探してみます?」

テイルビースト事件で4人はサソリにそんな能力があることを知っている為、別段驚くこともなかった。

しかし、サソリが断わりもなしにこのような行動をとることに興味が芽生えた4人は共にサソリの支配下にある畜生道さんの搜索が始まった。

(サソリの支配下って卑猥な表現だな……)と一人で赤くなる佐天だったが誰にも気付かれなかったのでセーフです。

店内を見渡す……橙色の頭なし!!(畜生道の判断基準らしい)

となれば店外か……とサソリを視界に捉えながら外を一望するが驚く程、簡単に見付かった。

サソリの右側のガラス越しにまさかの橙色の畜生道と同じ髪色をし

たツンツンヘヤーの男性が会話しているのが分かった。
しかし、残念ながら会話の声は喫茶店の強固なガラスに阻まれてい
るため全く聴こえない。

4人はサソリに気付かれないようにヒソヒソ話で畜生道とあの橙ツ
ンツンヘヤーの男性の正体について予想する。

「誰なんでしょう?…」

「あの感じですと昔別れた彼女ではありませんのよ……今更、復縁
なんて難しいですわよ」

「一回、白井さんの案でやってみますか!!?」

ガラス越しのアフレコ!!

「橙色に愛を込めて」

配役

畜生道 白井黒子

橙色ツンツンヘヤー男性 佐天涙子

ツンツン「会いたかったよ!!アンジェリーナ(畜生道さんのこと
です)!!もう一度やり直さないか」

佐天さんが頑張って男の子っぽい声を出す。

畜生道「ジョニー(ペインさんのことです)……それは無理でござ
いますわ……わたくしのお腹の中には、ボブから授かった命がありま
すの……」

ツンツン「なんだって!!やっぱりボブと出来て……」

「カアアトオオ!!なんじゃこれ!重っ!!昼ドラか」

なぜか白井の頭をポカーンと殴る御坂。

「痛いのです!…」

「アンタがややこしくしてるのよ！！誰よボブって！」

テイク2

「あの…やっぱり髪が同じ色ですから兄妹じゃないでしょうか？」
初春の意見に納得いったように佐天が手をポンと叩いた。

「よし次は初春が畜生道役だ！！テイクツー！」

引き裂かれた兄妹

～悲しき宿命～

配役

畜生道 初春飾利

橙色ツンツンヘヤー 佐天涙子

畜生道「会いたかったですう！！お兄さん！」

ツンツン「アンジェリーナ（しつこいですが畜生道のことです）…

…」

畜生道「どうしたんですか？7年も姿を消してしまつて…でも、これから一緒に暮らせませうね！！」

ツンツン「…ダメだ…ダメなんだアンジェリーナ！…俺は一緒に暮らせない…」

畜生道「何ですか！？大丈夫ですよ！私達はたった一つの繋がりなんですよ！？」

ツンツン「すまない…俺はこれから…魔王軍との戦争が…」

「ストオオプウウ！！何この急展開！！魔王軍と戦いにいつちゃうの！？」

「もう、御坂さん！！ダメですよちゃんと台本を読んで貰わな

いと…これだから新人声優さんは…」

佐天がベテラン風の声優（おそらく15年間やってるであろうのレベル）に成り切って言った。

「台本、最初からないでしょ！！………というかどれだけのドラマが喫茶店の前で展開しているのよ！！」

一応の注意）

学園都市に魔王はいません………けど、一番怖いのは魔王ではなく人間の心なのです。

御坂さんのもつともな反論であるが…佐天さんも負けてないです。

「少しくらい人間関係をこしょう…しないとアクセス数が伸びないですよ！！やっぱ人間は大袈裟な話しが好きなんですから！！」

「佐天さん、誇張こちやうですよ……」

×こしょう 誇張

それから……

「じゃあ、御坂さんが主演で話を進めてみますか！」

勝負よ！！

くツンツンのあの人に届けく

配役

畜生道 御坂美琴

畜生道「今日という今日は決着をつけてやるんだからっ！！勝負しなさいよ」

ツンツン繋がりで……読者の皆様には分かります。

3、畜生道大作戦（前書き）

やっと春らしい陽気になりましたね……ポカポカとした日射しと新生活に思いを馳せます。

なんで畜生道をアンジェリーナにしたのか悩む（なんか古いネーミングだ）。

まあ、今回で登場も終わりだと思いますけど…

3、畜生道大作戦

晴れ渡る学園都市のお昼近く。

元戦争請け負い組織「暁」のメンバーであった「赤砂のサソリ」の目の前に現れたのは組織のリーダーである「ペイン」だった。

……はてさてどうなるのでしょうか？

畜生道の姿を借りて喫茶店の前にいるペインの着ている外套の裾を引っ張った。

「何でいるの？……」

やつと出てきた一言がこれだった。

ペインは、チャクラの質を確認するように輪廻眼を見開く。

「サソリか……よかった……探知でこの近くにいることは分かったのだが……障害が多くな……何で畜生道の姿なんだ？」

かつて木の葉を襲撃した際の戦力の一つが自分に話しかけているという奇妙な光景に思わず「ふっ……」と苦笑にも似たため息を吐き出す。

「……まあ、こつちにも都合があるから勝手に使わせて貰っているだけだ……」

「そうか……最初の問いに関してだが……全員が集まってから説明した方が手間が省けるだろう……」

えっ！！……全員！？

畜生道の輪廻眼が大きく開き、嫌な汗がダラダラと出てくるのを感じた。

サソリ
本体の方に意識を集中させてチラリと佐天達に視線を移す。

（どどど、どうすんだよ！！アイツらいるのかよ……正直会いたくないんだけど！）かつての同僚として他里を襲撃した面々が集結するとなれば心情が揺さ振られるのは必然である。

「……勝負しなさいよ！！」

御坂が佐天に向けて指さして叫ぶ。

一応座っているで周りの目はそれほど気になりません。

「また、お姉様はあの類人猿のことですの……」

「御坂さんいきなり勝負を仕掛けた……はっ！！最初は最悪の状態でスタートするのを立派なラブロマンスですね！！」

「佐天さん……話がズレてる気がしますよ」

「そうかな！？……でも、やっぱり畜生道のキャラなら甘えん坊ですよね！！」

「そうですね……お姉様やお兄様等の歳上の御方に愛嬌を振りまく女性ですの」

「ついでにドジとかもしますよね！！」

「……ああ！！確かに（ですの）！！」

「アンタら畜生道の何を知っているの！？……第一、畜生道操ってるのってサソリじゃん！！」

サソリが一生懸命「どうしようか？」と悩んでいる隣では意味不明な会話が乱立して少々目眩を感じる。

（絶対に会わずとマズいよな……コイツらのことだから質問攻めをしてくるだろう）

そう頭の中で意見をまとめたサソリは、これからのことをシミュレーションする。

まず、喫茶店の前にいるのはリスクが高過ぎるので畜生道を使ってペイン達を別の場所に移動させる。

「まあ、少し手が離せないとも言っておけば通じるだろう……」

次にペイン達を移動させたら佐天達に「用事が出来た…」とでも言
って抜けてくればややこしい展開になるまい……

まあ……多少は演技力が必要だが、暁の組織に加わって幾度となく潜入任務に就いた経験があるから問題ないだろう。

作戦の骨組みが出来た所でサソリは畜生道に意識を向けて話しを始める。

「いや……少し用事が立て込んでいるから場所を変え……」

「もしもおおし!!!」

サソリ本体に強烈な佐天の声が耳をつんざいた。

まだ、余韻の残る耳を抑えてサソリがかみつく。

「何しすんだよ!!!?」

「だってさつきから話しかけているのに無反応なんだもん！とこ
ろでさ、畜生道の性格ってどんな感じ？」

人の耳をダメにしておいて何だその質問……

「知らねーよ!!!オレに振るな!!!巻き込むな!!!」

「まったく畜生道に意識向けた途端に変な質問してきやがって……」 作戦

が失敗したらどう……あれっ？畜生道が話さないように止めてたっけ？オレ……

「あれ……あのツンツンの人がこちらに気づいたようですよ」

初春の現状報告がサソリの身体の動きを鈍くさせた。

「本当ですわね……喫茶店でアンジェリーナ（畜生道のことです）と話してもしたいのですわきつと！」

「サソリどうしたの？さつきから妙に顔色悪いけど」

落ちつけオレ……組織に入ってたころはヒルコ（術者の身を守る傀儡）に入ってただろ……顔なんて晒していないから大丈夫だ。

殺された時にメンバーのアロエさんに見られていたことは知らない。

慌て畜生道を操ってペインを再度誘導させようとするが……

「デイダラ……サソリを見付けた……このままオレについてこい……」

他の六道に連絡をしていた。

ギャアー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0299s/>

とある暁の都市平和（パクス・シティーニア）

2011年10月9日23時44分発行